

第 14 回記憶認知応用研究学会 (The 14th Biannual Meeting of Society for Applied Research in Memory and Cognition)

言語聴覚学専攻 松尾 加代

2 年ごとに行われる記憶認知応用研究学会 (Society for Applied Research in Memory and Cognition : SARMAC) の第 14 回大会が、2023 年 8 月 9 日～13 日に名古屋で開催された。SARMAC は私の大好きな学会であり、2009 年の第 8 回大会以来、ほぼ毎回のように参加している。記憶をはじめとした認知心理学の応用研究の発表の場であり、目撃記憶や顔の認識など司法に関連した研究から、バイリンガルの記憶や、発達と認知の関係に関する研究など、認知心理学の研究領域の範囲で幅広いテーマが扱われている。大会では、大学院生からベテラン研究者まで、世界中の認知心理学者たちがそこかしこで議論を展開する非常にアクティブでフレンドリーな大会である。今大会は、コロナ禍による 2019 年以來 4 年ぶりの開催となり、研究者たちが久しぶりに対面で再会できたことも後押しして、大盛況な大会であった。今回は、本学の卒業生である辻杏奈さんの卒業研究についてのポスター発表を連名で行った。

研究発表タイトルは「においの熟知度の違いによる言語隠蔽効果の検討 (Verbal overshadowing effect on a difference in familiarity of odor stimuli)」というもので、においの記憶に関する研究である。人の記憶は、我々が信じているほど正確ではなく、さまざまな要因による影響を受けて変容する。たとえば、言葉で説明することが難しい刺激 (色や顔など) の記憶について、その記憶内容を説明すると、再認成績が悪くなることがある。これを言語隠蔽効果という。本研究では、言語隠蔽効果がにおいの記憶でも起こるか、また、よく知っているのにおいと知らないのにおいで、言語隠蔽効果に違いがあるのかを検討した。柑橘系のアロマオイルを用意し、実験参加者にターゲット刺激のにおいについて説明してもらった後、4 種類の刺激の中からターゲット刺激を再認してもらった。この手続きを、においの熟知度高・低の 2 条件で行っ

た。その結果、熟知度が低いにおいにおいて、言語隠蔽効果の傾向がみられた。つまり、よく知らないのにおいについて説明した場合、説明しなかった場合と比べて、ターゲット刺激を正しく選択できない傾向がみられた。しかし、よく知っているのにおいについては説明してもしなくても、再認成績に違いはみられなかった。本研究結果より、よく知らないのにおいを言葉で説明すると、元の記憶が変容する可能性が示唆された。

ポスター発表には多くの方が来てくださった。辻さんは学会に参加すること自体が人生初であったにも関わらず、英語が共通語となる国際学会の雰囲気に吞まれることなく、しっかりと発表をしていた。果敢に挑戦する姿を見て彼女を誇りに思うと同時に、ここまで研究の指導ができたことに感謝が溢れた。私自身は「顔認識とラインナップ」研究の口頭発表セッションで座長を務め、私にとっても人生初の経験をさせていただいた。第 14 回 SARMAC の参加は、私にとって思い出深いものとなった。しかし、どこまでが正確な記憶であるか定かではないことを最後に記しておく。

